

報告

保健医療学系大学学生の卒前における段階的多職種連携実践科目の 教育評価 (第二報) —1学年と4学年の到達度の比較—

青木信裕¹⁾, 中村充雄²⁾, 首藤英里香³⁾, 後藤葉子²⁾, 竹田里江⁴⁾, 澤田いずみ³⁾, 大日向輝美³⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科 ²⁾ 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科
³⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科 ⁴⁾ 杏林大学保健学部

目的：在校生へのアンケート調査から1学年と4学年の結果に着目し、「保健医療総論」のチーム医療実践能力に関わる学習について4年間の到達度を検討した。方法：我々が作成した保健医療総論の学習到達度に関する28項目のアンケートを保健医療学部各学年の学生に対して保健医療総論受講前後に実施した。得られた結果から、保健医療総論受講前の1学年と全ての保健医療総論を受講後の4学年のアンケート結果を比較した。結果：全ての項目において、4学年の割合が高値を示した。到達度の度合いは質問項目によって異なっており、専門性を活かしたコミュニケーションは到達度合いが低値であるものの積み上げ効果が確認された。チーム医療能力に関する項目では、自職種・他職種の理解が4年間で図られたことが示唆された。結論：「保健医療総論」は4年間の積み上げ学習により、チーム医療実践能力に関わる自己評価の到達度を高めることに有効な教育である。

キーワード：多職種連携教育, 保健医療総論, 教育評価, アンケート調査, 自己評価

Educational evaluation of stepwise interprofessional practice courses for university students in school of health science (second report) : Comparison of achievement in grades 1 and 4

Nobuhiro AOKI¹⁾, Mitsuo NAKAMURA²⁾, Erika SHUDO³⁾, Yoko GOTO²⁾, Satoe TAKEDA⁴⁾,
Izumi SAWADA³⁾, Terumi OHINATA³⁾

¹⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Department of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

³⁾ Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

⁴⁾ Faculty of Health Sciences, Kyorin University

Purpose: To focus on the questionnaire survey results of first and fourth graders and examine the effects of four years of achievement on team medical practice ability of "Healthcare." Method: We conducted a 28-item questionnaire survey to gauge the learning acquired by students in school of health science of each grade before and after taking the course on healthcare. The survey results were used to compare the learning acquired by first graders before attending the course and fourth graders after attending the course. Results: In the case of all the items, the score of fourth graders was higher than that of first graders. The degrees of achievement differed, depending on the question item and the communication effect utilizing the expertise was confirmed to have a cumulative effect although the degree of achievement was low. Regarding the item on team medical practice ability, it was suggested that an understanding of one's own occupation and that of others' was achieved in four years. Conclusion: The education on "Healthcare" is effective in improving achievement of self-assessment related to team medical practice ability through four years of accumulated learning.

Key words: Interprofessional Education, Health Sciences, Educational Evaluation, Questionnaire Survey, Self-Assessment

Sapporo J. Health Sci. 9:58-62(2020)

DOI:10.15114/sjhs.9.58

I. はじめに

近年の健康ニーズの複雑化や医療従事者の不足を背景に多職種が協働して良質なケアを提供することが求められ、1978年、世界保健機関（WHO）はIPE（interprofessional education）をプライマリヘルスケアの重要な要素と位置づけた。2010年には「専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組み」¹⁾を作成し、実践・研究に関わる情報提供等を通じてIPEを推進している。日本においても、1990年代より、医科系大学にIPEに関わる報告が見られはじめ²⁻⁵⁾、チーム医療をはじめとした多職種連携実践（IPW:interprofessional Working）の質の向上を目指した研究が本格化している。

本学部では2000年度よりチーム医療実践能力の育成を目的として、看護学科、理学療法学科、作業療法学科の合同科目である保健医療総論1~4の4科目を1~4学年までの各年次に開講している。これらの科目では1学年で学内教職員対象のインタビューの計画と実施を通じてのコミュニケーション技術の学習、2学年で高齢者施設における見学実習を通じて利用者の生活と専門職の役割理解に関する学習、3学年で医療現場における他職種のシャドーイングを通じて他職種理解に関する学習を行う。4学年ではそれまでの学習も踏まえて、地域で生活する健康障害をもつ当事者へ直接インタビューを行い、チームでケアプランを策定・説明する学習を行う。4科目を通じて、本学部におけるチーム医療を学ぶ特徴的な授業として教育課程に根付いている科目である。これまでに各科目での教育効果としてグループ学習の方法や学習課題についての報告⁶⁻⁷⁾はされているものの、保健医療総論1~4を行うことによる学生の4年間の到達度については検討されていない。

そこで今回は、各保健医療総論前後の在校生にアンケート調査を行う機会を得たことから、保健医療総論を受講する前の1学年の結果と、全ての保健医療総論を受講した4学年の結果を検討し、保健医療総論1~4を受講することで得られるチーム医療実践能力に関わる自己評価の到達度について報告する。本研究では、学生が自己評価として到達できた実感できた項目を到達度として評価し、保健医療総論を受講していない学生と、4年間の保健医療総論全てを受講した学生の結果を比較することで、4年間の保健医療総論の積み上げ学習の効果として自己評価による到達度について報告する。

II. 方 法

1. 対象

2018年度に札幌医科大学保健医療学部在籍し、保健医療総論1から4を受講した保健医療学部全学生を対象としてアンケート調査を実施した。本研究では、1学年と4学年の

学生の結果を対象として使用した。1学年は看護学科49名、理学療法学科20名、作業療法学科20名の合計89名、4学年は看護学科50名、理学療法学科20名、作業療法学科20名の合計90名を対象としてアンケートを配布した。

2. アンケート調査方法

チーム医療実践能力を測定する指標として、保健医療総論1~4を通しての到達目標を踏襲した「保健医療総論学習目標到達度に関わる自己評価票（以下、自己評価票）」を作成した（表1）。自己評価票の質問項目は、対人コミュニケーション能力の指標として対人コミュニケーションにおける態度に関わる5項目、意図的コミュニケーション技術に関わる6項目、チーム医療能力の指標として自職種・他職種理解に関わる4項目、チーム連携能力に関わる8項目、倫理的態度の指標として5項目、総計28項目から構成されるものである。

アンケートの実施方法として、2018年4月の各科目の開講前と終講時に自己評価票および回答用のマークシートを学生に配布した。自己評価票の各項目については、「できる」「まあまあできる」「普通」「あまりできない」「できない」の5段階で回答を求めた。匿名性を確保した上で、前後比較ができるよう無作為に割り付けたコード番号を記載した小封筒を配布し、前後のマークシートを封入してもらい回収した。目標到達度自己評価の結果について単純集計を行い、「できる」と回答した割合を到達度として1学年開講前（以下、1開講前）と4学年終講時（以下、4終講時）の到達度の比較を行った。本研究では、各項目を十分に到達できたと自己評価した学生の内訳を到達度として抽出するために、「できる」と回答した割合のみを到達度とした。

アンケートを実施するにあたり、対象者には研究の目的や調査内容等について口頭・書面で説明し、署名で同意を得た。なお、本研究は札幌医科大学倫理委員会の承認を受けて行った（承認番号29-2-29）。なお、本研究において開示すべき利益相反状態は存在しない。

III. 結 果

1開講前は89名から回収し、有効回答は86部であった（有効回答率96.6%）。4終講時は89名から回収し、有効回答は77部であった（有効回答率85.6%）。

1. 対人コミュニケーション能力：対人コミュニケーションにおける態度（図1-A）

4終講時において「1. 礼節を持った対応ができる」では52名（67.5%）、「3. 疾病・障害を持つ人から学ぶ姿勢を持つことができる」では58名（75.3%）が「できる」と回答した。その一方で、「2. 疾病・障害を持った人に対し安心感のある対応ができる」では1開講前で6名（7.0%）、4終講時で21名（27.3%）、「4. 医療者に対して信頼感のある対応ができ

表1 保健医療総論学習目標到達度に関わる自己評価票

項目		回答番号	質問内容
I 対人コミュニケーション能力	対人コミュニケーションにおける態度	1	礼節をもった対応ができる
		2	疾病・障害を持った人に対し安心感のある対応ができる
		3	疾病・障害を持つ人から学ぶ姿勢を持つことができる
		4	医療者に対して信頼感ある対応ができる
		5	疾病・障害を持つ人との協働関係を持つことができる
	意図的コミュニケーション技術	6	意図を明確にした情報収集を計画できる
		7	時と場合をわきまえた会話を行うことができる
		8	時と場合をわきまえた観察を行うことができる
		9	疾病・障害を持つ人の健康・生活に関する情報に広く関心を持つことができる
		10	支援プランに必要な情報を適切な方法を用いて得ることができる
		11	支援プランについて対象者にわかりやすく伝えることができる
II チーム医療能力	自職種・他職種理解	12	保健医療福祉専門職の種類と役割の概要を説明することができる
		13	実際の支援における他職種の具体的な役割を説明できる
		14	自職種の専門性を説明できる
		15	多職種支援の意義を説明できる
	チーム連携能力	16	グループワークを通じてメンバーシップにおける自己の傾向・課題・特徴に気づくことができる
		17	他者との関わりにおいて多様な価値観・考え方があることに気づくことができる
		18	考え方の相違について、相手の立場を踏まえて自分の意見を述べるることができる
		19	お互いの意見の違いを話し合い、妥当点を見出すことができる
		20	他職種からの支援への意図に関わる情報を得ることができる
		21	自職種の支援への意図を他職種へわかりやすく説明することができる
		22	多職種のチームで支援プランを立案することができる
23	多職種との連携・協働を形成する為に、必要な能力について自分の意見を述べるることができる		
III 倫理的態度	24	医療人を目指すものとして、真摯な姿勢で学習に参加することができる	
	25	自己の責任を自覚し、適切に報告・連絡・相談することができる	
	26	医療人として守秘義務と個人情報保護の重要性を理解した行動をとることができる	
	27	多様な価値観を尊重することができる	
	28	自己の課題を意識でき、向上のために努力できる	

る」では1開講前で9名(10.8%)、4終講時で29名(37.7%)、「5. 疾病・障害を持つ人との協働関係を持つことができる」では1開講前で20名(23.3%)、4終講時で29名(37.7%)が「できる」と回答しており、4終講時であっても到達度の向上は小さかった。

2. 対人コミュニケーション能力：意図的コミュニケーション技術(図1-B)

4終講時において「7. 時と場合をわきまえた会話を行うことができる」では44名(57.1%)、「8. 時と場合をわきまえた観察を行うことができる」では39名(50.6%)、「9. 疾病・障害を持つ人の健康・生活に関する情報に広く関心をもつことができる」では54名(70.1%)が「できる」と回答した。その一方で、「6. 意図を明確にした情報収集を計画できる」では1開講前で6名(7.0%)、4終講時で26名(33.8%)、「10. 支援プランに必要な情報を適切な方法を用いて得ることができる」では1開講前で6名(7.0%)、4終講時で20名(26.0%)、「11. 支援プランについて対象者にわかりやすく伝えることができる」では1開講前で7名(8.1%)、4終講時で15名(19.5%)が「できる」と回答しており、4終講時であっても到達度の向上は小さかった。

3. チーム医療能力：自職種・他職種理解(図1-C)

4終講時において「14. 自職種の専門性を説明できる」では39名(50.6%)、「15. 他職種支援の意義を説明できる」では39名(50.6%)であり、4終講時の到達度は約5割であった。その一方で、「12. 保健医療福祉専門職の種類と役割の概要を説明することができる」では1開講前で4名(4.7%)、4終講時で27名(35.1%)、「13. 実際の支援における他職種の具体的な役割を説明できる」では1開講前で1名(1.2%)、4終講時で28名(36.4%)が「できる」と回答しており、4終講時であっても到達度の向上は小さかった。

4. チーム医療能力：チーム連携能力(図1-D)

「17. 他者との関わりにおいて多様な価値観・考え方があることに気づくことができる」の到達度は、4終講時で57名(74.0%)であった。その一方で、「20. 他職種からの支援の意図に関わる情報を得ることができる」では、1開講前で2名(2.3%)、4終講時で30名(39.0%)のみが「できる」と回答した。

5. 倫理的態度(図1-E)

倫理的態度を構成する5つの項目の到達度は、1開講前では25.6～59.3%と項目によってばらつきがあったが、4終講時においては74.0～83.1%と高い割合となっていた。

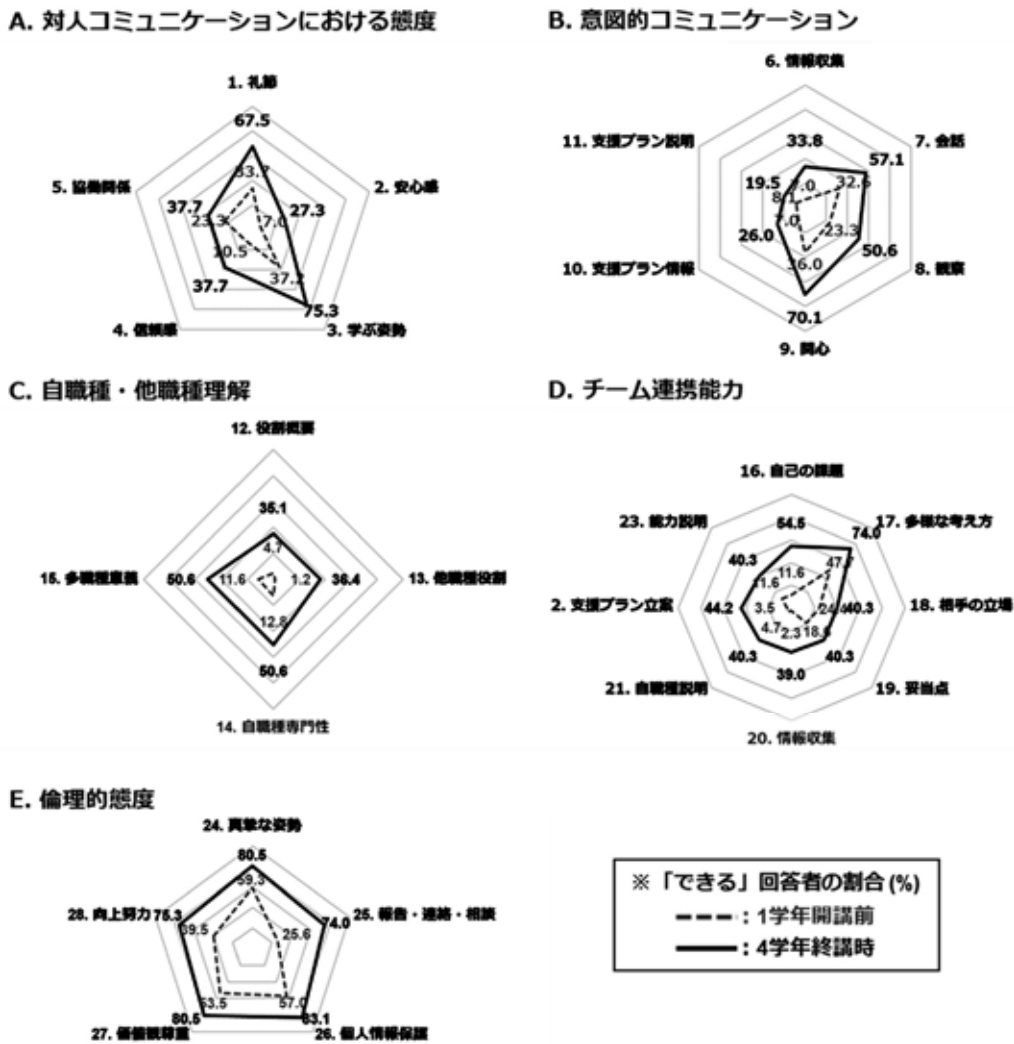


図1 自己評価票の回答結果

各項目については、「できる」「まあまあできる」「普通」「あまりできない」「できない」の5段階で回答。「できる」と回答した割合を到達度としてグラフに記載した。有効回答数は1学年で86名、4学年で77名。

IV. 考 察

4年間の学びとして、保健医療総論1開講前と保健医療総論4終講時を比較したアンケート結果では、全ての項目で保健医療総論4終講時の方が「できる」に到達した学生が多くなっており、学年を積み重ねることによるチーム医療実践能力の向上がみられた。しかし、到達の割合は項目により異なっていた。

コミュニケーション能力では、対人コミュニケーションに関わる態度を示す「礼節のある態度」や「対象者から学ぶ姿勢」、意図的コミュニケーション技術を示す「対象者への生活への関心」については、4終講時の到達度は7割と高かった。しかし、意図的コミュニケーション技術を示す「支援プランに必要な情報収集」や「対象者への支援プランの説明」は、4終講時の到達度は約2割と低値にとどま

った。礼節や学ぶ姿勢、対象者への関心といった項目は1学年から4学年の保健医療総論それぞれで必要な項目であることから到達度の向上が大きかったと考える。その一方で、支援プランに関する項目はチーム医療実践能力としての難易度が高い可能性に加えて、4学年の保健医療総論のみで学習した項目であり学習機会が少なかった結果、到達度の向上が小さかったことが考えられる。これらの項目は、その後の各専門領域での実習体験により、卒業時には若干の増加が見込めると考えられる。

チーム医療能力については、自職種・他職種理解を示す「自職種の専門性や他職種支援の意義の説明ができる」について、1開講前の到達度は1割程度であったのに対して、4終講時は5割程度となり、「専門職の種類と役割の説明」、「他職種の役割の説明」の到達度は4割となっており、4年間の学習を経験したことにより到達度が向上した。また、チーム連携能力を示す「他職種から支援の意図を聞く」、「自

職種への支援の意図を説明する」についての到達度は1開講前の1割から4終講時には4割となり、さらに、「多様な価値観・考え方への気づき」については、4終講時に7割以上と高く到達度の向上が認められた。この基盤が、学年を追うごとに専門性を増していく課題の到達を可能にし、チーム医療を実践していくことに困難さを感じながらも多様な考えを尊重し連携していくことの大切さの認識を形成していると考えられた。

倫理的態度については、4終講時には全ての項目で到達度は8割となっており、4年間の学習で十分な到達度に達していた。これは、4年間の保健医療総論で様々な対象者や環境での学習を経験したことにより、多くの学生が倫理的な態度について到達できたことが考えられる。

今回のアンケート調査の結果は異なる集団の学生を比較した横断的研究であることから、4年間の学習の積み上げ効果を比較することには限界がある。しかし、4学年の学生は全ての保健医療総論を受講した結果を自己評価として表現しており、保健医療総論全体の学習によって到達できたことを推察できる可能性はあると考える。その一方で、4学年の自己評価の中には保健医療総論以外の講義・演習・実習を経験することによるチーム医療実践能力の変化も含まれている。保健医療総論のみの学習効果については主観的評価だけでなく、客観的評価による学習効果の評価を行うなど課題は残されていると考える。しかし、3学科の教員合同でチーム医療実践能力とは何かを議論し、評価指標の一案を提示できたことは成果であったと考える。

V. ま と め

保健医療総論1～4についての総合的教育評価として在校生へのアンケート調査を行ったことで、3学科合同で継続してチーム医療を教授することの意義を確認する機会となった。調査の結果、保健医療総論は4年間の積み上げ学習により、チーム医療実践能力に関わる自己評価の到達度を高めることに有効な教育であると考えられる。

謝 辞

今回の調査にご協力いただいた在校生の皆様、保健医療総論をご担当いただいた先生方には、このような報告の機会をいただき心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) World Health Organization (吉本尚, 竹村洋典, 四方哲監訳・監修): 専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組み. WHO_HRH_HP_N_10.3_jpn.pdf, (2019-09-13)
- 2) 専門職連携教育センター: IPE(専門職連携教育)とは. <https://www.iperc.jp/>, (2019-09-13)
- 3) 土屋滋, 大貫稔, 福屋靖子他: 筑波大学方式チーム医

療実習12年間の経験. 医学教育21: 249-256, 1990

- 4) 小河原はつ江, 伊藤まゆみ, 遠藤文雄他: チームワーク実習における4年間の教育評価. 群馬保健学紀要24: 93-101, 2004
- 5) 阿部恵子, 安井浩樹, 内山靖他: 在宅における多職種連携教育－医学生と理学療法学大学院生の協働－. 医学教育46(6): 503-507, 2015
- 6) 吉野淳一, 後藤葉子, 佐藤公美子他: 保健医療総論1における学生へのアンケートを用いた学習効果に関する検討. 札幌保健科学雑誌4: 73-78, 2015
- 7) 吉野淳一, 根木亨, 中村充雄他: 保健医療総論1における学習効果に関する検討～学生に向けた3か年のアンケート調査から～. 札幌保健科学雑誌6: 47-52, 2017